

最優秀賞

「自然や宇宙と交信する建築」

作品番号：12

水がつくる距離 ～公共トイレにおける「滞在」の再設計～

中部大学大学院 工学研究科 建設工学専攻 修士2年

安藤 友補

中部大学 工学部 建築学科 3年

立松 将吾

情報にあふれた現代、公共トイレではスマートフォンを長時間使用する「こもりスマホ」が問題となっている。そこで私たちは、「水」を介して「太陽」を身体的に感じる公共トイレを提案する。水が生み出す空間と光の変化によって、太陽の存在や時間の移ろいを感じる。こうした建築を通して、スマートフォンとの距離を遠ざけ、自然や宇宙との距離を近づけるきっかけをつくる。

水がつくる 距離

— 公共トイレにおける「滞在」の再設計 —

01 僕らの宇宙の情報

～宇宙の情報＝太陽～

宇宙は、私たちの身の回りにさまざまな情報を送り続けている。かつて人々は、空を見上げ、光や影の変化を感じることで、宇宙の情報を身体的に受け取っていた。しかし現代では、スマートフォンの発達によって画面から得る情報が増え、自然や宇宙から届く情報を身体で感じる機会が少なくなっている。そこで私たちは、数ある宇宙の情報の中でも、日常の中で最も身近に感じることのできる「太陽」に着目した。太陽の光、位置、そして時間とともに変化するその姿を、宇宙から私たちの身体へ届く「情報」として捉える。

02 公共トイレにおける「こもりスマホ」

スマートフォンの普及により、公共トイレの個室は、用を足すだけでなく画面を見ながら時間を過ごす場所にもなりつつある。こうした「こもりスマホ」は、個室の滞在時間を長引かせ、利用したい人が使えない状況を生んでいる。また、一人で過ごし、自分自身と向き合う場所であったトイレにまでスマートフォンが入り込み、画面の中の情報に意識が向けられている。本提案では、スマートフォンに向けられた意識を宇宙の情報へと移すことで、公共トイレにおける「滞在」のあり方を再設計する。



出典：Statista 2025年6月6日付の調査データをもとに作成

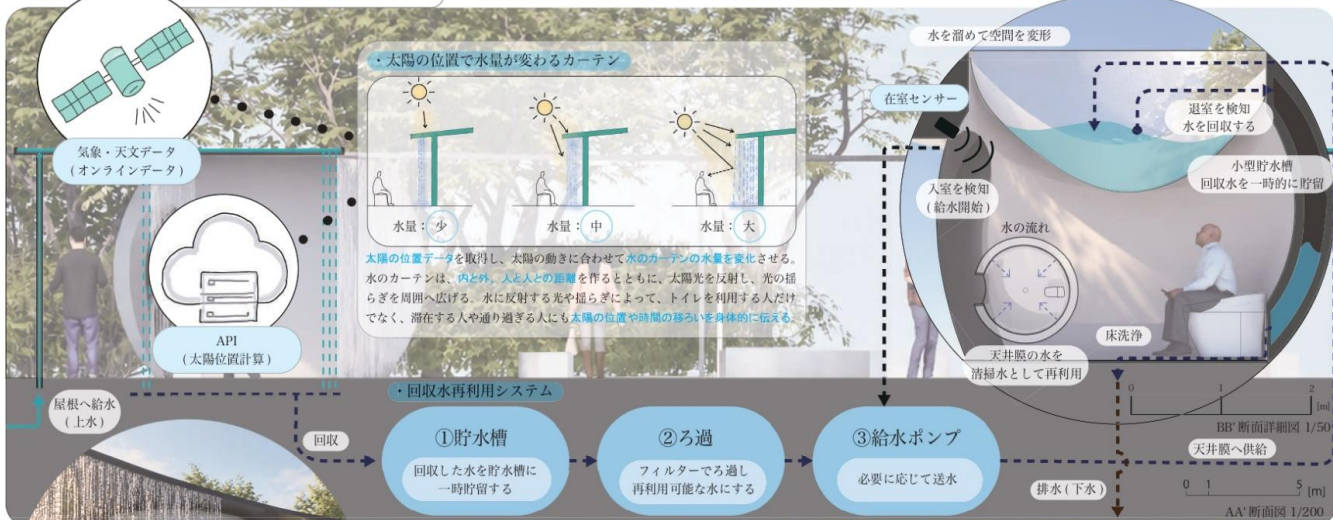
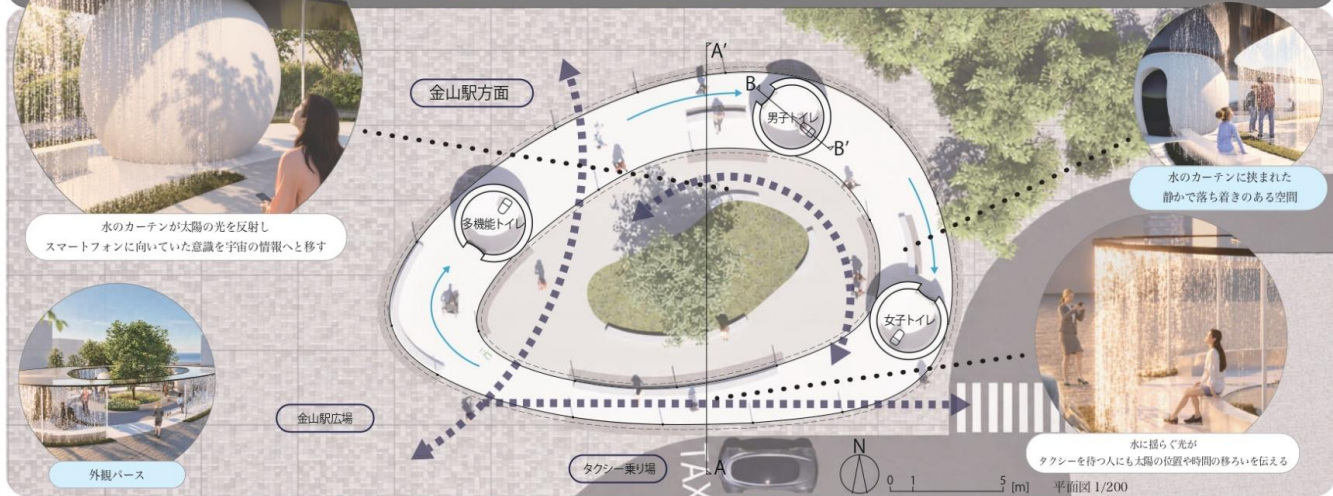
03 「滞在」を問う敷地

今回の敷地は金山駅南口にある既存の公共トイレを対象とした。敷地を考えると私たちは「回転率が求められるトイレ」と、「長時間利用の影響が大きい」の2つを重視した。金山駅周辺は鉄道やバス、タクシーなどの公共交通機関が集まるハブである。そのためトイレの長時間利用が次の利用者に影響しやすく、滞在時間を問う本提案に適していると考え本敷地に決定した。



04 水を介した建築のしくみ

・たまる水、たわむ天井





優秀賞

作品番号：6

Soil & Orbit

職と景を耕すグラウンドポート

北海道大学 工学部 環境社会工学科 建築都市コース 4年

岩井 洸樹

大地を読む身体、宇宙から大地を読むデータ。

農業・酪農と宇宙産業が共存する大樹町に、雪・家畜・水・熱・
情報を循環させるグラウンドポートを提案する。

自然の変化を身体で感じながら、衛星・GIS・センサーで同じ
大地を読み返し、現場知と観測データを重ねる。

自然との身体的な交信と宇宙との情報的な交信を建築の中で
結び、季節を超えて地域資源と人の知をめぐらせ、新たな風景と
営みを耕す場をつくる。



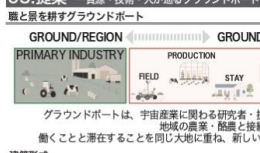
01. 背景 一近接する産業、分断された資源と営み



02. 敷地 一産業をつなぐ第一ノード



03. 提案 一資源・技術・人が巡るグラウンドポート



建築形式



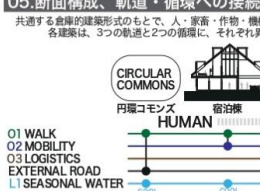
01. SEASONAL WATER LOOP



02. BIORESOURCE LOOP



03. LOGISTICS ORBIT



04. 断面構成、軌道・循環への接続



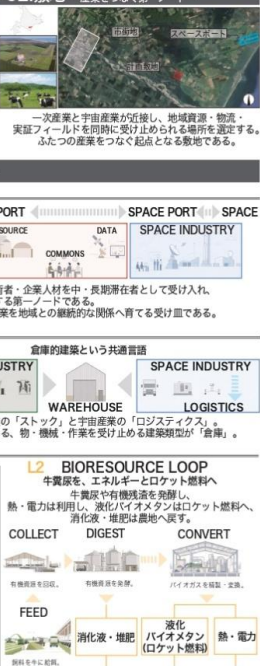
05. ピクセルランドスケープ 一衛星が読み取る単位を、地表をつくる単位へ変換



06. ピクセルランドスケープ 一衛星が読み取る単位を、地表をつくる単位へ変換



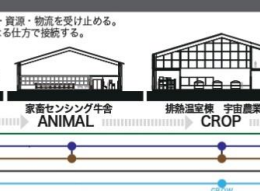
04. マスタープラン



03. LOGISTICS ORBIT



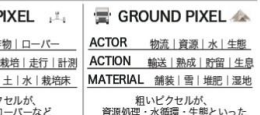
02. MOBILITY ORBIT



01. WALK ORBIT



07. 円環コモンズ 一大地を読み、季節を受け止める共有の中心



07. 円環コモンズ 一大地を読み、季節を受け止める共有の中心





優秀賞

「自然や宇宙と交信する建築」

作品番号：2

宙庭 - 自然と宇宙をつなぐ建築

愛知工業大学 工学部 建築学科 4年

飯田 翼

磯部 隆太郎

「宙庭」は、日常の中で宇宙とのつながりを感じるための建築である。円環状の空間と中央の水庭によって空を切り取り、太陽や月、星の光、季節の移ろいを建築へと導く。光や風、雨など地球を巡る自然現象を通して、遠い存在である宇宙を身近な体験へと変え、人と自然、そして宇宙との関係を再認識する場を提案する。

そらにわ 宙庭

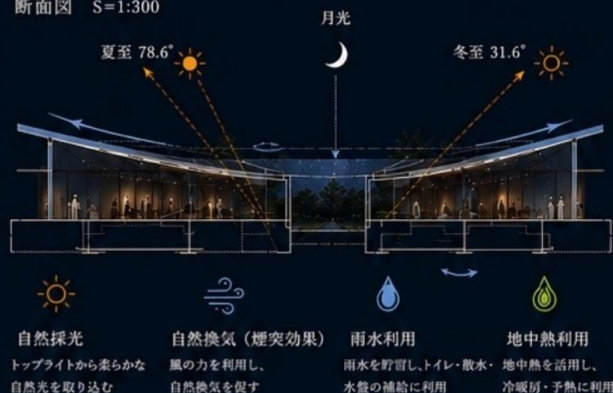
— 自然と宇宙をつなぐ建築 —

人は昔、風や太陽、月の満ち欠けから季節を知り、生活していた。
しかし現代では、情報はスクリーンから得ることが多く、自然や宇宙を直接感じる機会は減っている。

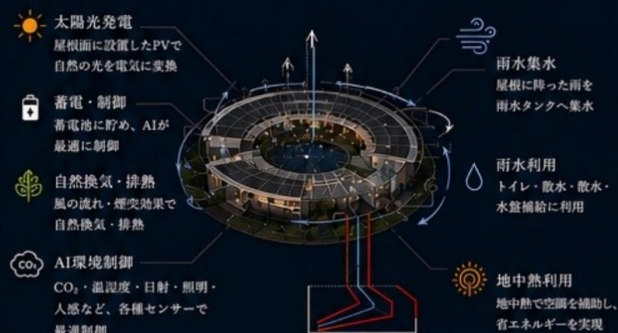
この建築は、自然と宇宙を感じる装置である。
中央の庭は空を映し、風や光、雨や音、星や月を五感で感じることができる。
建築そのものが、自然や宇宙と交信し、人々の感覚を呼び覚ます。



断面図 S=1:300



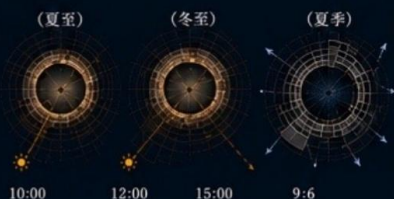
環境システムダイアグラム



パース・内観



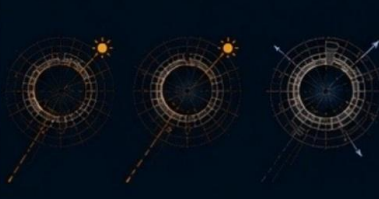
光のダイアグラム



内観・開口部詳細 S=1:30



ダイアグラム



内観パース



星空ホール（夜）
水面に映る星を眺め、静かに宇宙を感じる大空間。

学びの場（展示エリア）
自然や宇宙の仕組みを体験的に学ぶ展示空間。

宿泊室（夜）
窓と木を感じながら、月明かりのもとで静かに休む。

SUMMARY (200字概要)

「宙庭」は、自然と宇宙とのつながりを建築によって取り戻すことを目的とした環境学習・滞在施設である。太陽光発電、自然換気、地中熱利用、雨水利用などの環境設備とAI制御を組み合わせ、建築そのものが自然と呼吸を存在する。中央の水盤は窓月、星を映し出し、人々が自然や宇宙を五感で感じられる空間を創出する。建築を通して自然との新しい関係性を提案する。

- 主動線
- サブ動線
- 風の流れ（夏季）
- 太陽高度（夏至）
- 太陽高度（冬至）
- 建築範囲
- アプローチ
- 既存樹木
- 水系（水道）





入賞

作品番号：13

海に生きる人、火場に集う人へ —海女小屋から始まるまちのコモンズ—

神戸大学 工学研究科 建築学専攻 1年

中村 梓

篠崎 楓日

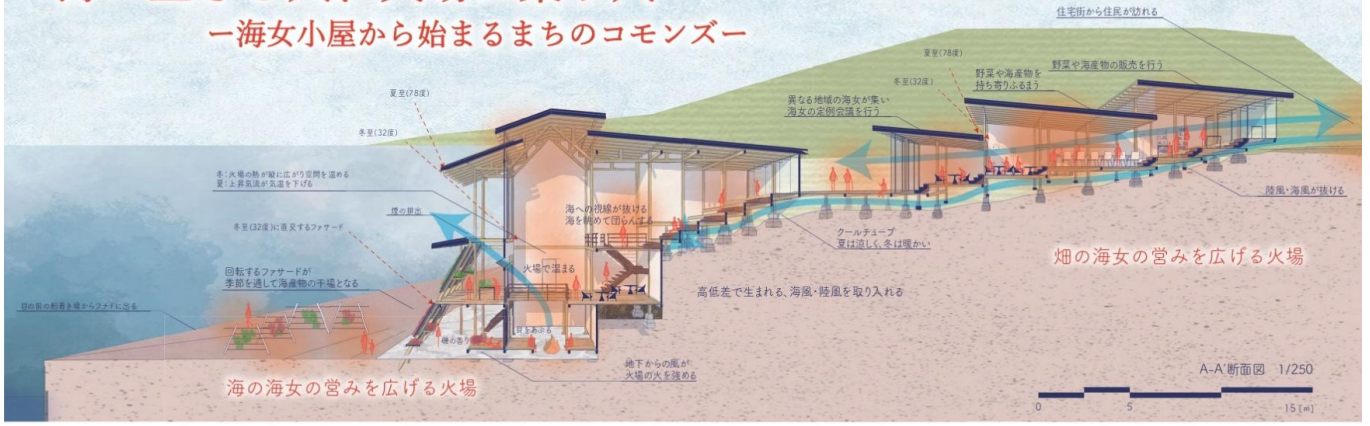
寶正 風香

人間は本来、潮や風、季節などの自然のリズムの中で生きてきたが、その感覚は失われつつある。海女は、潜り、耕し、干すことで海と山の自然を読み取り生きる存在である。

本提案では、三重県鳥羽市国崎で、海女小屋の「火場」を現代のコモンズとして再解釈し、環境装置として取り入れる。火場の熱の広がりや段差を利用した通風を建築化することで、海女文化を単に保存するのではなく、自然との関わり方を住民が問い直す場を創る。

海に生きる人、火場に集う人へ

ー海女小屋から始まるまちのコンモンズー



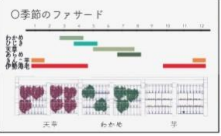
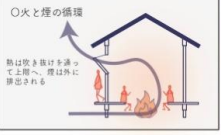
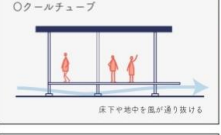
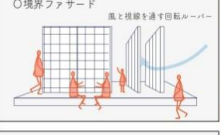
01 背景

現代社会

人間は本来、潮の満ち引きや風向き、季節の変化を読み取り、自然のリズムの中で生きていた。これは特別なことではなく、人間が当たり前に持っていた生き方。しかし現代において、この感覚は失われつつある。

海女と自然の営み

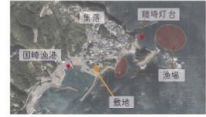
海女は海に潜るだけでなく、畑も耕し、季節に応じて獲るものや干すものを切り替えながら、自給的な暮らしを組み立ててきた。つまり海女は、海と山の自然を読み取り生きるとい暮らし方をそのものを体現する存在である。



02 敷地

三重県鳥羽市国崎

国崎は海と山が近く、漁業と農業が両立する地形を持つ。海女文化が残る、自然と共に生きる知恵が息づいている。

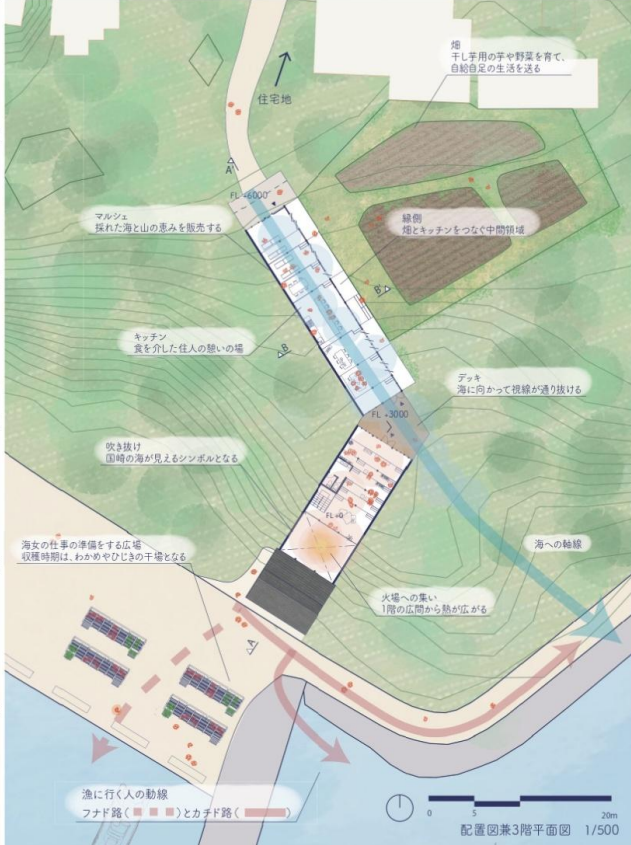
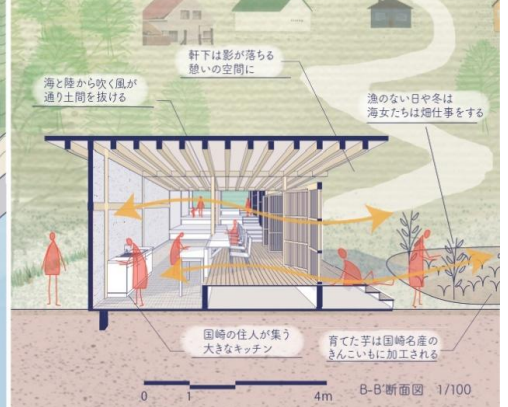


03 提案 火場のコンモンズ

身体を温める 通風を手に入れる 語り合う 食事をする
人と自然、過去と現在、海の営みと山の営みといった様々な要素が入り混じりながら蓄積されていく社会的な営み

火場を現代のコンモンズとして再解釈
火場を海女の生業を象徴する環境装置として取り入れる

海女の生き方を手掛かりに、現代の暮らし方、自然とのかかわり方をものを問い直す





入賞

作品番号：22

鳥暦

近畿大学大学院 建築学研究科 建築デザイン専攻 1年

神谷 直輝

現代人は、カレンダーや天気予報によって季節や天候を情報として知る。一方、渡り鳥は複雑な環境変化を身体で読み取り、地球を移動している。鳥の行動そのものを暦と捉え、そこに現れる自然と宇宙の兆候を建築が人間の身体へ翻訳する。鳥を介して季節や土地の状態を読み、暮らしや営みを変化させながら、人の時間を地球の時間に同期させる提案。

鳥暦

渡り鳥の飛来を土地の時間に編みこむ観測施設

八郎潟の干拓は、渡り鳥に餌場を与え、ねぐらを築いた。海面下のこの土地は、排水を止めれば湖に繋がる。保護区の緑で雁の飛来を記録し、群れが増えれば冬の田に水を戻し、北へ帰れば水を落とす。人は、渡り鳥の暦を通して地球の時間に同期する。



01 | 身体へ還る暦

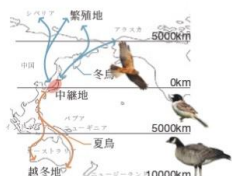
現代人は、カレンダーや天気予報によって季節や天候を情報として知る。一方、渡り鳥は複雑な環境変化を身体で読み取り、地球を移動している。鳥の行動そのものを暦と捉え、そこに現れる自然と宇宙の光景を建築が人間の身体へ媒介することを試みる。



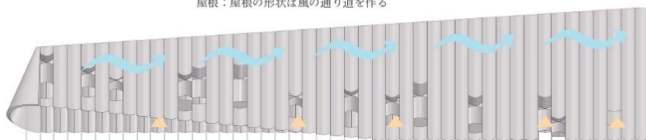
出典：1ヶ月カレンダー



出典：TBSテレビ「天気予報」



屋根：屋根の形状は風の通り道を作る



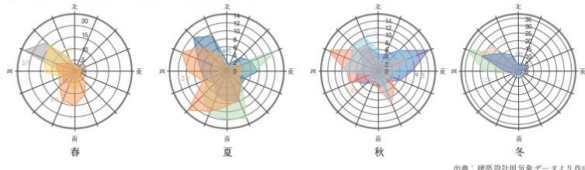
スロープ：高さ変化が、バードウォッチャーの視点に変化を生む

02 | 秋田県南秋田郡八郎潟町



八郎潟は二番目に広い湖だった。干拓により湖面の2割が陸になり1.2万haの農地が冬の餌場となった一方で、ねぐらとなる水面は大きく縮小した。海面より4mも低いこの土地は、24時間休みなく、水をくみ出しており、排水を止めれば湖に戻る。オオセウカの繁殖が秋田県内で初めて確認された事をきっかけに、1977年（昭和52年）に国指定大草原原野鳥獣保護区が指定。200種類ほどの野鳥が観察できる。

03 | 風から読み解く形態



出典：建築設計用気象データより作成

冬は日本海からの季節風が西から北西の間で吹き、強い風の日の8割がこの向きに集まる。夏は南南西の穏やかな風が続く。屋根を時計回りに振ることで、西面で冬の季節風を受け流し、南面で夏風を受け止める。

東西の軸からわずかに時計回りに振ることで、風に応える角度が、野鳥を見るための角度でもあった。



04 | 太陽に従う開口と渡り鳥

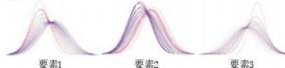
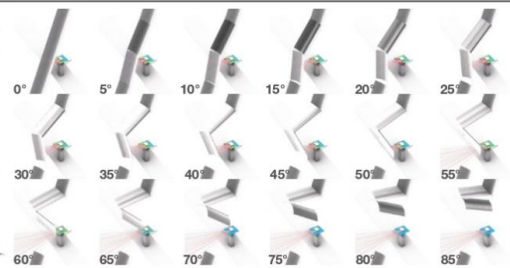
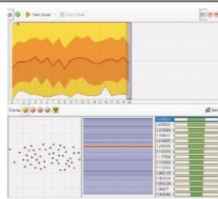
雁の時立ちは、太陽の運行に応じて日の出前後に起こる。500m先の保護区を望み、12月の夜明けの光で時間を知るために開口が要るが、半屋外空間では開くほど天空への放射損失が増え、平均放射温度が下がる。開口角度の最適化により、その中間解を導く。

要素1：野鳥の可視率を最大化

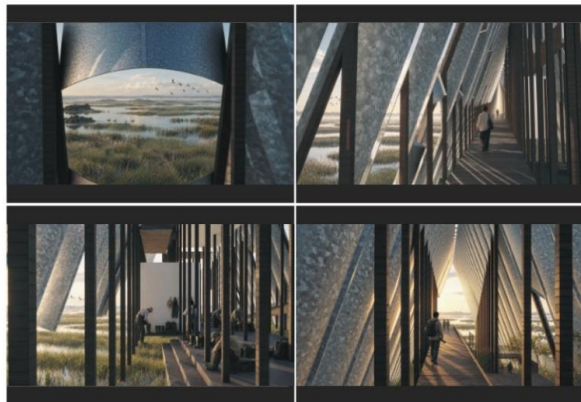
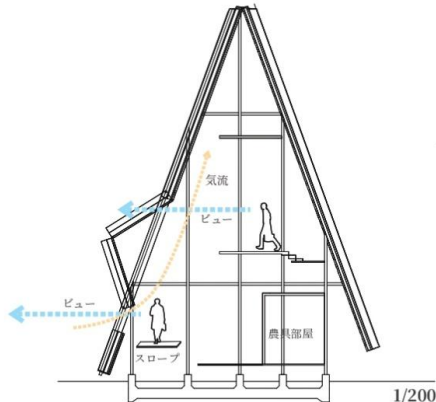
要素2：12月夜明けの受光を最大化

要素3：天空放射損失の最小化

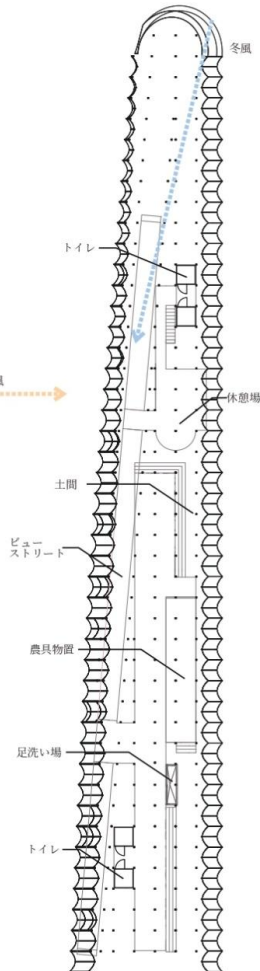
開口の動きによって季節、時間の推移を身体に記憶させる。



開口角度は要素1-3のパラメーターを用い、GrasshopperのLadybugを用いた最適化シミュレーションを行うことで意の角度導いた。



1/200



1/400



入賞

作品番号：23

-273 | 15

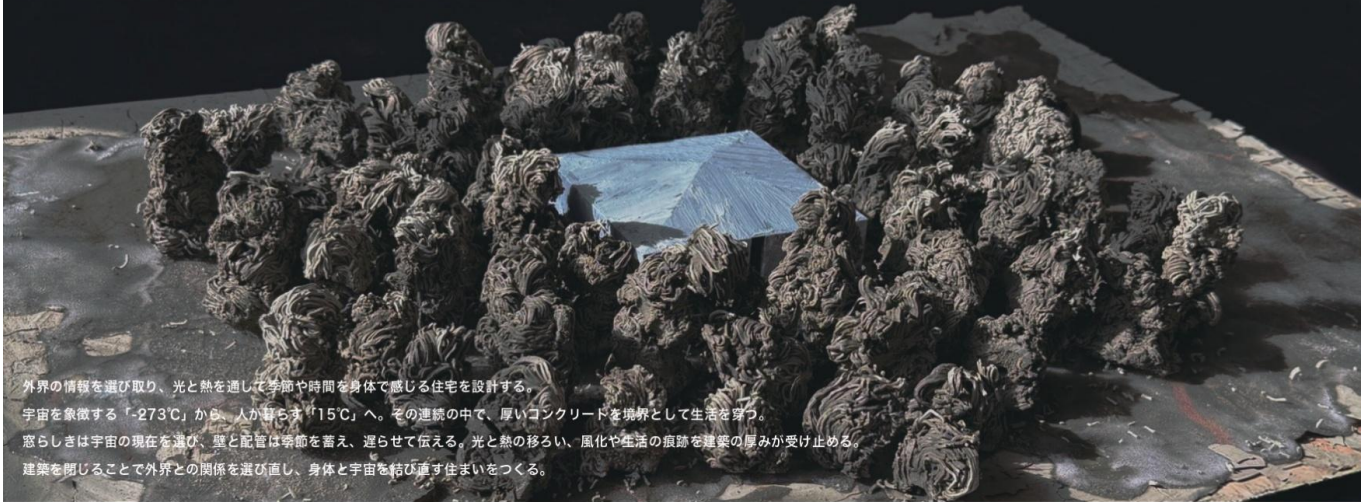
早稲田大学大学院 創造理工学研究科 建築学専攻 2年

辻本 雄一郎

早稲田大学 創造理工学部 建築学科 4年

中川 香乃

外界の情報を選び取り、光と熱を通して季節や時間を身体で感じる住宅を設計する。宇宙を象徴する「-273℃」から、人が暮らす「15℃」へ。その連続の中で、厚いコンクリートを境界として生活を穿つ。窓らしきは宇宙の現在を選び、壁と配管は季節を蓄え、遅らせて伝える。光と熱の移ろい、風化や生活の痕跡を建築の厚みが受け止める。建築を閉じることで外界との関係を選び直し、身体と宇宙を結び直す住まいをつくる。



外界の情報を選取り、光と熱を通して季節や時間を身体で感じる住宅を設計する。

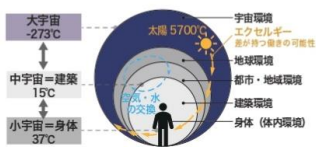
宇宙を象徴する「-273℃」から、人が暮らす「15℃」へ。その連続の中で、厚いコンクリートを境界として生活をつづ。

窓らしきは宇宙の現在を運び、壁と配管は季節を蓄え、運らせて伝える。光と熱の移ろい、風化や生活の痕跡を建築の厚みが受け止める。

建築を閉じることで外界との関係を選び直し、身体と宇宙を結び直す住まいをつくる。

01 BACKGROUND

身体を包む三つの宇宙



太陽から届く光と、地球が宇宙へ放つ熱。私たちはその交換が続く環境の中で生きている。身体という小宇宙は、建築という中宇宙を介して大宇宙へ連なる。三つの宇宙は、光や熱、空気を受け渡す交換の連続である。

02 PROPOSAL

エクセルギーを調整する装置



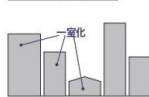
環境との温度や濃度の差が持つ、働きを生み出す可能性がエクセルギーである。身体も建築もエネルギーや物質を受け取り、その可能性を使う過程でエントロピーを生成する。本計画は、生成と排出の場所、速さ、経路を編成する。選ぶ、遅らせる、渡す。その三つの操作によって差異の寿命を伸ばし、身体へ届く環境を組み立てる。

03 SITE

強い外部としての自然に閉じる



Ver.1: 都市に閉じる



Ver.2: 自然に開く



Ver.3: 自然に閉じる (本計画)

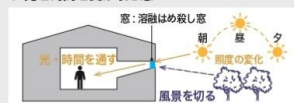


日光近郊の自然豊かな敷地で、自然という強い外部にあえて閉じる。視線や騒音、風景といった過剰な情報を削ぎ落とし、太陽の運行や昼夜、季節の変化だけを運んで取り込むことで、身体が再び季節や時間を知覚する住まいをつくる。

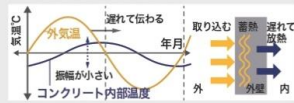
04 DESIGN-SECTION

エンタロピーを再調停する境界としての外皮

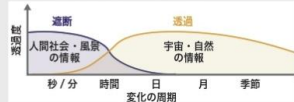
I 光と時間を受け取る窓



II 季節を遅らせて伝える壁



III 情報のフィルターとしての外皮



窓風景の連続から、時間を受け取る装置へ変える。厚い壁を貫く窓らしきは、周囲の景色を切りながら、天候や昼夜に伴う照度の変化を内部へ届ける。光のわずかな変化が意識に上る。

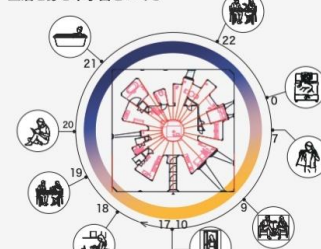
コンクリートの厚みを外気の変化を遅らせて伝える媒体とする。蓄えた熱が内部を移動するあいだに、内壁の温度は外気とは異なる速さで変化する。その応答を半年 8760 時間で追う。

外皮を変化の周期を遅らせるための境界として捉える。視線や騒音といった断片的かつ過剰な情報を濾り、太陽の運行や昼夜、季節といった、長い宇宙の周期だけを身体へ届ける。

05 DESIGN-PLAN

身体の距離から作られる中宇宙

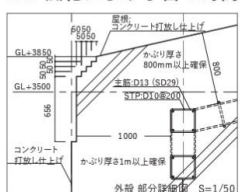
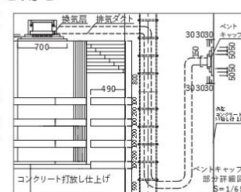
生活を穿ち中宇宙をつくる



壮大な宇宙との関係を、床に座る一人の身体からつくり直す。身体という小宇宙を原点に、距離や行為の順序を、厚いコンクリートへと穿つ。中心には用途を定めない空間を置き、その周囲に必要な機能を創出。身体から住まいの形を彫り出し、使いながら居場所をつくり続ける。その定点で光と熱が伝わる宇宙の時間を身体で受け取る。

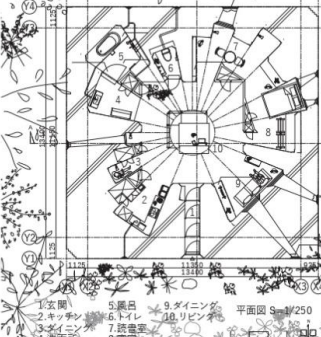
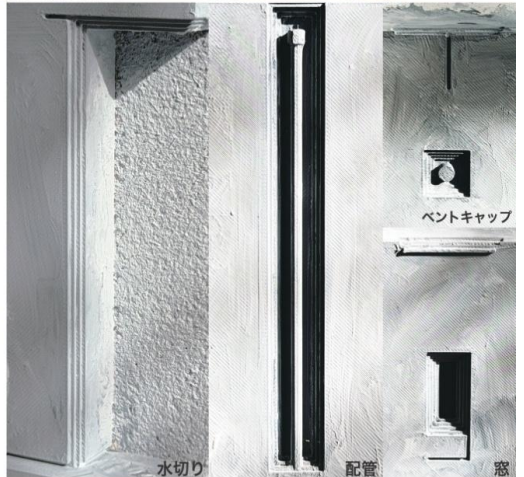
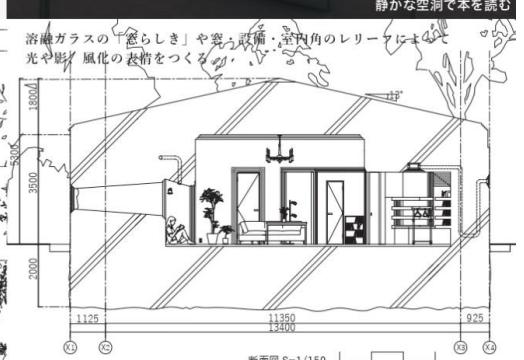
06 DETAIL

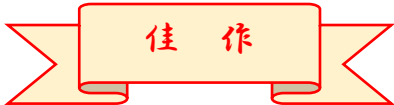
風化により宇宙の時間を刻む



コンクリートは打放しのまま外部に晒し、黒ずみや風化を建築の時間として受け入れる。窓やベントキャップの周囲にはレリーフ状の水切りを刻み、雨筋や汚れの現れ方そのものを立面として設計する。

内部には配管を蛇行させ、熱をゆっくり移動させることで温度のグラデーションをつくる。一方表層では、風化は受け入れ、鉄筋を深く配置することで、変化する外殻と長く残る構造体を両立させる。





佳作

作品番号：3

水をすくう

神戸大学 工学研究科 建築学専攻 修士1年

小野綾音

河合友理子

槌谷結

姿を変える水を利用し都市の微気候を変える建築を作る。都市の表空間の快適さは、ときに裏路地に居心地の悪い空間を生む。繊細なメッシュを裏路地にかけて、集めた朝露を利用し微気候を変化させることで、この都市の「しわよせ」を解決する。風と温度の分析によって架けられたメッシュは都市空間の余白を潤し、人間の自然と共生する感覚を取り戻す都市における新たな装置となる。

水をすくう

姿を変える水を利用し、都市の微気候を変える。

メッシュをかけた集めた朝露を利用し微気候を変化させ、都市のオモテが生むウラの「しわよせ」を緩める。

メッシュは都市の余白を直し、人間の自然と共生する感覚を取り戻す、都市における新たな装置となる。

02. 敷地

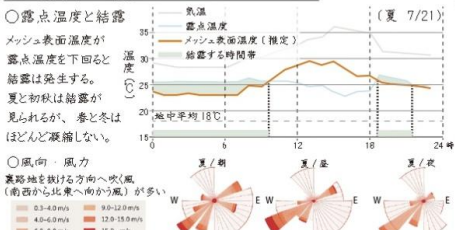


雑居ビルが密集する三宮駅北には、幅5mほどの裏路地がまちを縫うように走る。表通りが整い、ビルの内部が快適になると、行き場の無い「熱・湿気・水」は裏路地へ押し出される。



夏/朝 夏/昼 夏/夜

03. 分析 対象：神戸市三宮 駅北側裏路地

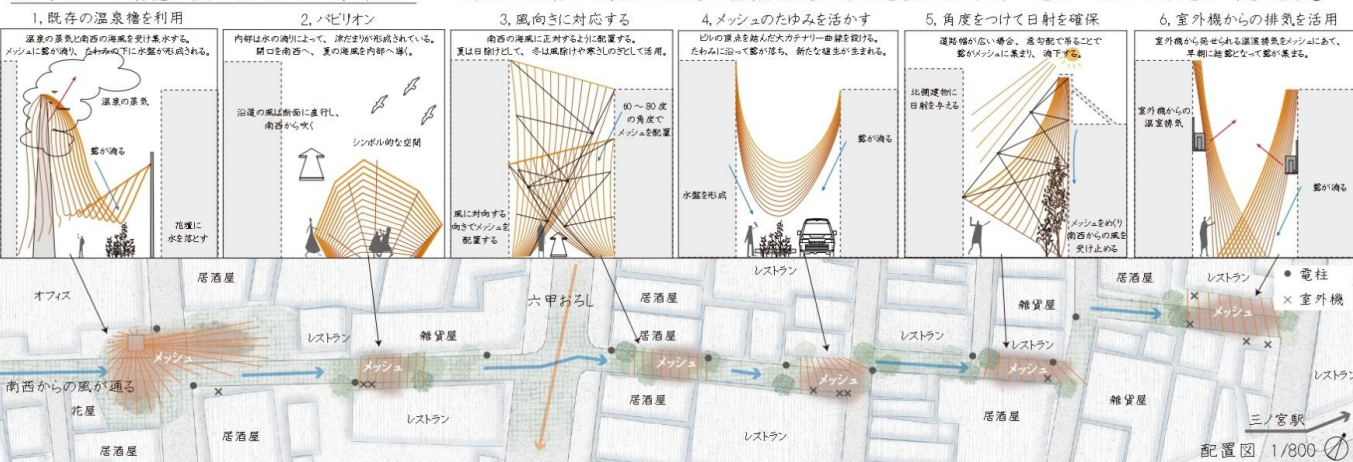
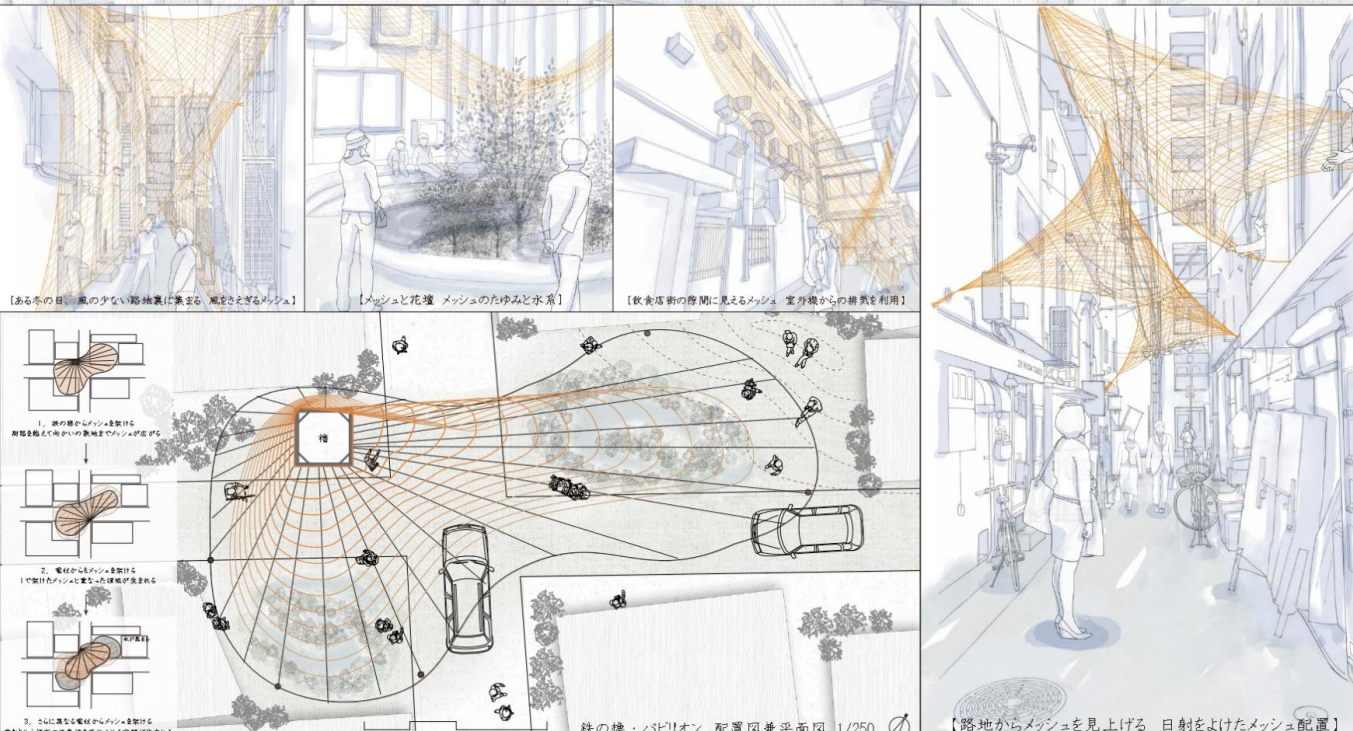


04. 提案の仕組み

キーワード：「微気候の調整」



05. 手法：環境が決めるメッシュの場所と形



佳作

作品番号：17

太陽の教会 (光学設備を用いた神聖性の表現)

ものづくり大学院 ものづくり学研究科 ものづくり学専攻 修士1年

村山 海人

教会のステンドグラスにおいて神聖性を生み出しているのは、神の図像ではなく、複雑に分布する色彩と光の現象ではないだろうか。本設計は、プリズムという光学設備を通して、太陽光という宇宙現象を様々な色や形に分解し、神聖性を生み出す教会である。時間や季節、天体運動によって変化する光は、神との交信ではなく、宇宙そのものと交信しているような感覚をもたらす。その変化し続ける光の現象が、空間に神聖性を与える。

太陽の教会

光学設備を用いた神聖性の表現

参考文献 : Derek Phillips 'Daylighting' (建築設計)
Eugene Fickler 'Optics' (光学), John Chace 'Introduction to Illuminating Optics' (照明光学入門), Robert L. Smith 'Modern Optical Engineering' (現代光学設計) 等
写真 : © Kölner Dom Richter Fenster
Detail — Geolma163, CC BY-SA 3.0 DE
Kölner Dom Richterfenster bei Nacht
— Raymond Spekling, CC BY-SA 4.0

1. ステンドグラスの神聖性とは？



※写真は CC ライセンスの許諾を得て使っています

中世の教会において、ステンドグラスは「聖書の物語」を光に乗せていた。しかしガルハルトリヒターが手がけたケルン大聖堂のステンドグラスには図像がなく、カラーチャートのような無数の色片が存在するだけである。
だが人は、そこに無意味な色面ではなく、神聖性を感じている。それは一体なぜか？それは、非線形色分布や光の揺らぎ、そういった偶然性に対して、「自然を超えた秩序」を感じるからである。つまり神聖性とは、図像ではなく“知覚の限界”によって発生するのではないだろうか？もしそうであるならば、これからの教会建築に必要なのは、神を描くことではなく、太陽の光という宇宙現象を複雑化し、人間の知覚へ接続することなのかもしれない。

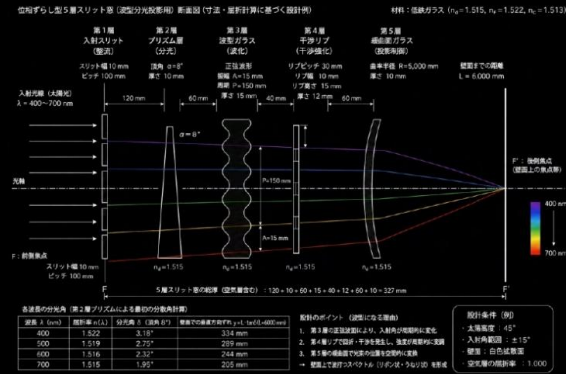
2. プリズムと太陽の運動

太陽光は、私たちにとってはただ白い光として見えている。しかし実際には、その内部には無数の色が重なっている。これを、プリズムによって可視化したい。プリズムによる分光は、その不可視だった色の違いを可視化し、空間の中へ表現できる装置だ。この分光によって現れる色彩は、固定されたものではない。太陽の光が朝と夕方で色が変わるのは、太陽高度と大気層の厚みが変化するからであり、季節によって光の角度が変わるのは、地球の地軸が傾いているからだ。そこには常に、天体運動と環境条件の痕跡が含まれている。つまりプリズムを通して可視化される色彩は、単なる装飾ではなく、宇宙の運動が空間に投影された痕跡なのである。



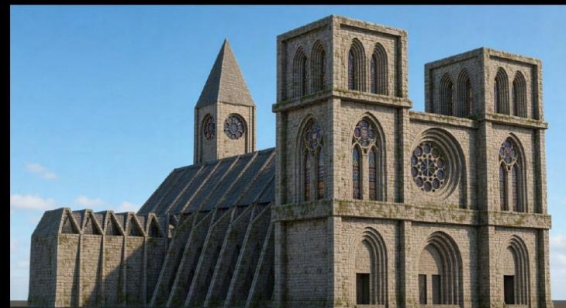
※写真は CC ライセンスの許諾を得て使っています

3. プリズムを用いた光学設備の提案



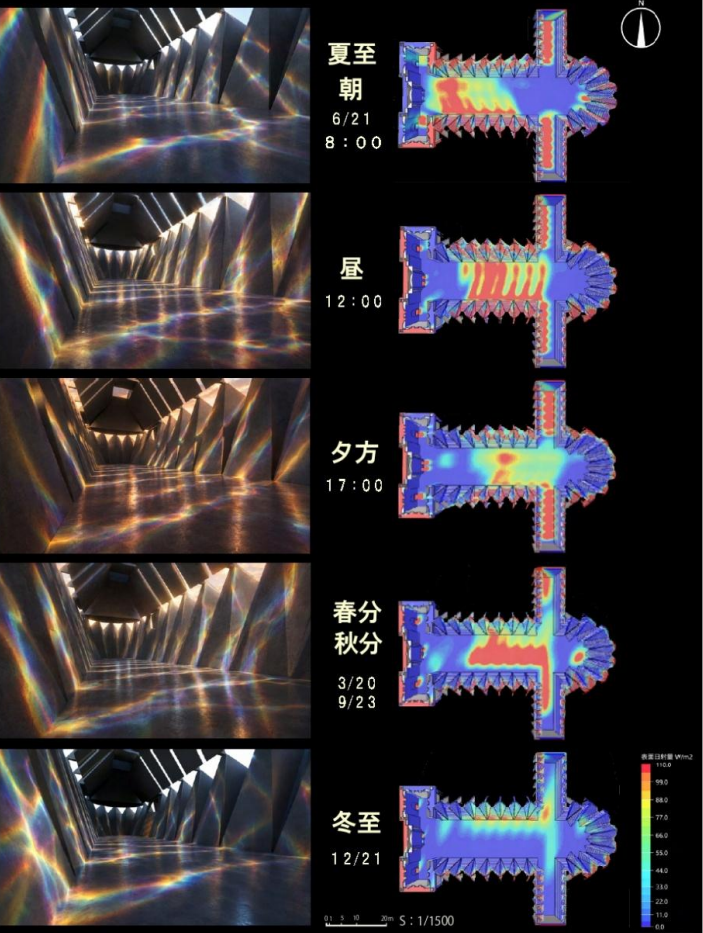
プリズムで分光した直線の光を波状に曲げるために、カメラの複層レンズを参考にした5層スリット窓を設計した。この窓はケルン大聖堂のような不規則な偶然性を生み出し、時間ごとに形や強弱が変わっていく。

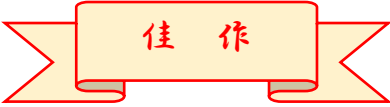
4. 建築・採光計画



建築様式はラテン十字型の単層式であり、入口から祭壇までの軸線を強調しながらも、側廊をもたない一つの大きな礼拝空間として構成している。壁面は外に向かって傾斜になっており、天窓からの光を反射するポケットのようになっている。身廊とは天窓と折半構造の壁が一体になっており、立体的な陰影と反射する光がリズム感を演出する。またスリット状の天窓によって光を床全体に映し出す。対して翼廊では光の模様とそのままだ映し出されるように、平面の壁となっている。

5. 環境シミュレーション・日射解析





佳作

作品番号：31

星の下の地底博物館

愛知工業大学 工学部 建築学科建築学専攻 4年

宮嶋 大彰

水谷 有羽

「日本一の星空」を観光資源として活用する一方で、観光客の増加は森林の伐採や光害を招き、守るべき星空そのものを壊す可能性がある。そこで本計画では、森林を切り開くのではなく、建築を地中へ沈める。地表の森を残しながら地下 50m へと降り、地層の変化を体験することで、星空だけでなく、その下に広がる大地の歴史にも目を向ける。自然を消費する観光から、自然と共存しながら地域の価値を伝える観光への転換を目指す。

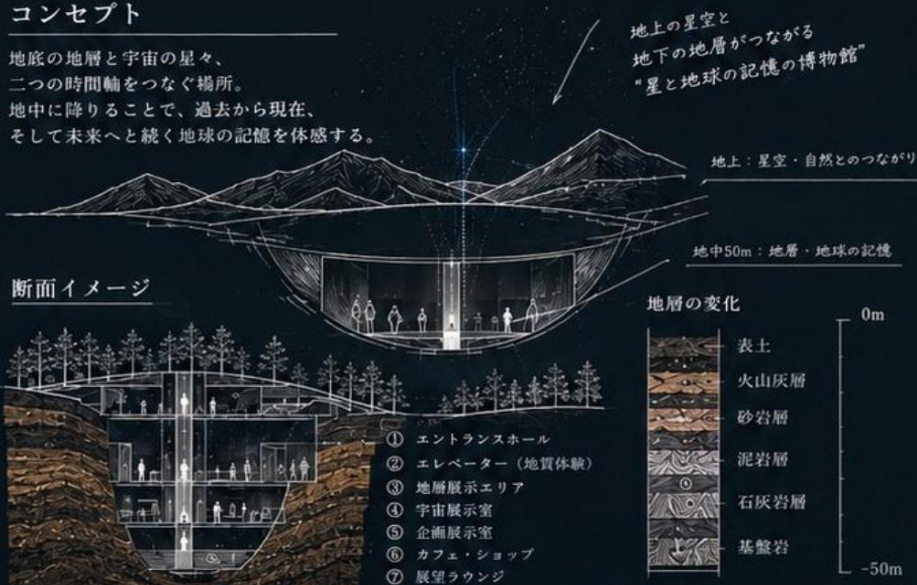
星の下の地底博物館

— 地下に降りるたび、地球の記憶と、宇宙の広がりに出会う —

阿智村の豊かな自然と、世界一の星空を背景に、
地中に広がる地層と、宇宙をつなぐ地底の美術館。
地上の喧騒から離れ、地下50mへと降りるその瞬間から、
私たちは地球の歴史と、宇宙の時間に包まれる。

コンセプト

地底の地層と宇宙の星々、
二つの時間軸をつなぐ場所。
地中に降りることで、過去から現在、
そして未来へと続く地球の記憶を体感する。



星空を見上げる地底の空間



宇宙展示室

地底にしながら、まるで宇宙に浮かぶような
星空の演出を体験できる。



地層展示エリア

地中の地層を実際に見ながら、
地球の歴史を感じることができる。

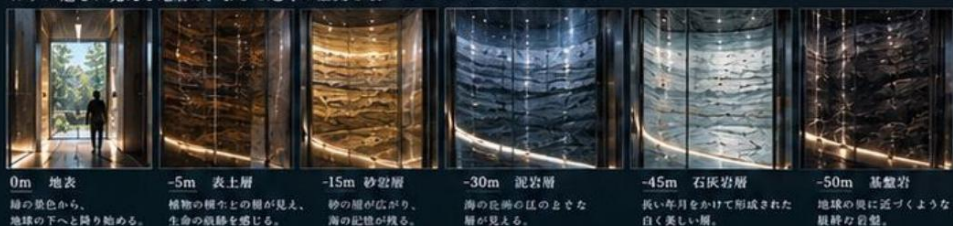


カフェ・ショップ

地底の独特な空間の中で、
ゆったりと過ごせる空間。

エレベーターで降りる

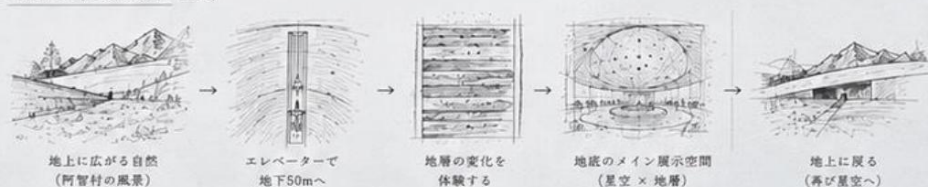
エントランスから地下50mへと続くエレベーターは、
地層の変化をリアルに感じることができる特別な体験。
ガラス越しに見える地層は、まるで地球の歴史を覗いているような感覚を与える。



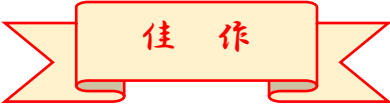
配置計画



エスキス（コンセプト・空間）



地底に眠る、地球の記憶。
そして、星とつながる未来へ—



佳作

作品番号：8

生態のしきい、万燈のしきい

愛知工業大学 建築学部 建築学科 4年

前田 裕夢

縄文の人々は空を読み、天と交信することで命を繋いだ。刈谷の万燈祭は雨乞いの祭礼であり、洲原池は天の恵みを蓄える器だった。しかし都市化とともに、池と人の距離は静かに遠のいている。失われた身体と宇宙の直接の交信を、建築として立ち現す。太陽の運行を室内に刻み、池面に映る夜の光が天への祈りを蘇らせる。洲原池のしきいに立つとき、身体はふたたび宇宙と会話を始める。



生態のしきい、万燈のしきい

4つのしきいのスキーム

01 水平のしきい

池と陸、自然と都市を
ゆるやかにつなぐ水平の通路。
生態系コリドーとしての
建築の基礎となる。



02 宇宙を覗く筒

屋根の筒は、空へと視線を導く。
光・風・雨・星を受け取り、
宇宙と対話する「覗き穴」となる。



03 池に浮かぶ万燈

夜、竹ルーバー越しの灯りが
池面に揺らぎ、万燈部の光を惹き立てる。
水上に浮かぶ現代の万燈となる。



04 大地に還る天窗

屋根の天窗は光を地上へ導き、
植物や学びの場を照らす。
光は大地に還り、循環を生む。



内観パース

カフェ・憩いのテラス



育苗温室・ワークショップ室



配根道歩道（緑生の中を歩く）



ーコンセプトー

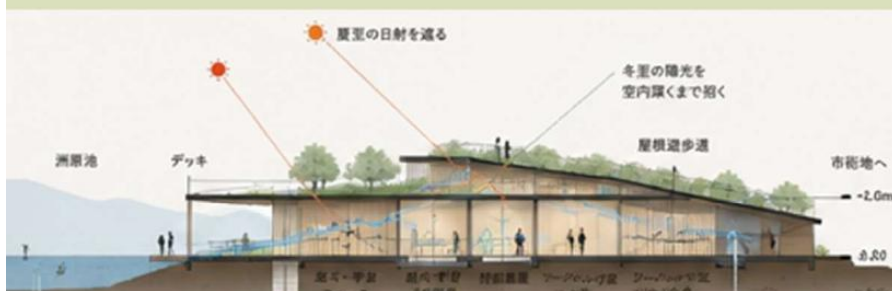
縄文の人々は空を読み、季節を知り、命を繋いだ。現代の
刈谷で、池面に映る空と風の流れが、ふたたび身体と
宇宙を結ぶ。

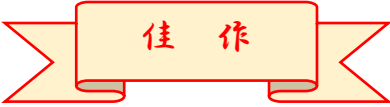
計画敷地



(<https://www.google.co.jp/maps/?q>)

情報が溢れる現代において、我々はいつのまにか、
身体で空を読む力を失いつつある。刈谷市北部、
洲原池のほとりに立つとき、池面に映る月と、竹の
間を抜ける風と、屋根の植生を揺らす季節の気配
が、それを思い出させてくれる。
夜の池面は月と万燈の灯りを揺らす。
建築は、人間と宇宙の交信装置になる。





佳作

作品番号：9

鵜と鵜

西日本工業大学 デザイン学部 建築学科 3年

西村勇雅

ウミウとミサゴ。

地球の70%を占める海と、宇宙に最も近い空が重なる瞬間を、2種の鳥に例えて建築空間で再現しようと試みる提案になります。

2種の鳥は、海などに生息し、魚が主食な共通点がある一方、狩りに関しては、ウミウは潜水するのに対して、ミサゴは空から水中に飛び込みます。全く違う2種は、一瞬だけ同じ海面に存在します。

そんな、海面で起こる海中と空の重なりを、太陽光を利用して建築空間で作り出します。

鵜と鵜

栂島に写る、日本屈指の透明度を誇る海を前にした、栂島山を斜めに上げる展望台と、その途中にある無人図書館が主な建築。

山に沿うように段々と建てられた7階の床と、それに比例して上がっていく海水面で構成された空間に、それを覆った三角トラスで構成されている。

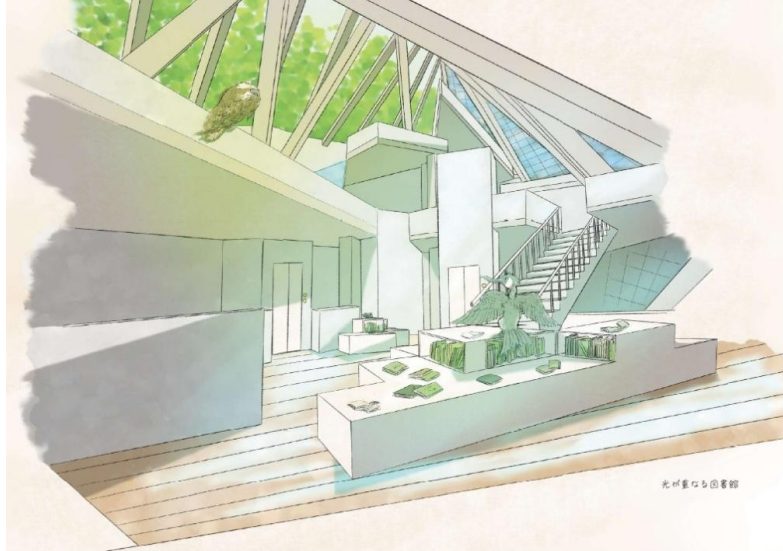
コンセプトはウミウとミサゴ。
空中から一気に海に降下するミサゴと、海に潜水しれ吞みして上昇するウミウを、海面の間に広がる空と海中に例え、それを体感できる空間が図書館に広がる。



段々と上がる床



展望台

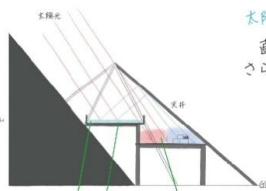


光が重なる図書館

太陽と海水と反射

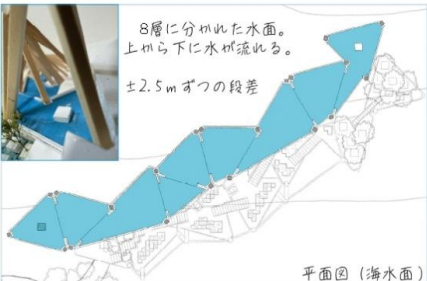
直射する太陽光が照らす空間と、海水面に反射した青い光が、さらに天井に反射してできる空間が重なる。

海水面を図書館よりも上に配置し、水面全体で太陽光を反射させる。天井面は白く反射させやすい材質で、図書館の床面まで光が届ける。天井面は角度に変化をつけさせてより広く光を広げる。



海水と光

海水の中では、赤や橙などの光は吸収されて弱くなるに対して、青い光は吸収されにくく残る。また、海底に光を反射しやすい白い砂を敷くことによって、反射された光が再び水を通ることで、青い光だけが残り、建物内に広がる。



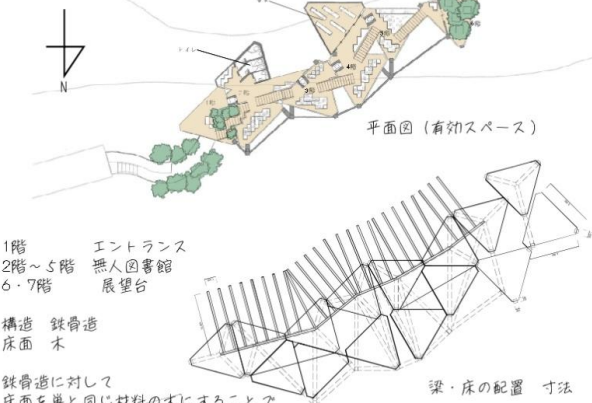
8層に分かれた水面。
上から下に水が流れる。
±2.5m ずつの段差



水面北側
山を逆らうように
梁を配置し、
間をガラスで張る

平面図（海水面）

平面図（有効スペース）



1階 エントランス
2階～5階 無人図書館
6・7階 展望台

構造 鉄骨造
床面 木

鉄骨造に対して
床面を木と同じ材料の木にすることで
木のイメージをより印象付ける

梁・床の配置 寸法



場所

高知県幡多郡七月町栂島。
宿毛湾の南に突き出た七月半島の先端に位置。

透明度の高い海と日本の1/3の魚が生息している地域。
光の反射に必要な透明度を誇る、特に魚を連想する鳥2種に
あった場所の選択。

建物の場所は、栂島山の北側に当たる場所に配置。
太陽を背に海を展望台で望める。



ウミウのイメージ

上がっていく

鳥の巣

ウミウとミサゴの巣をイメージした床の配置。
ウミウは、海岸の断崖・岩棚に巣を作る。
→段々に床を壁沿いに配置し、これを再現。
ミサゴは、海沿いの高木などに巣を作る。
→山々の木と同等か高い位置に床を配置し再現。

オブジェクト

本の配置をする場所を、腰掛ける場所に統一化。
腰掛ける場所ごとにジャンルをまとめる。
また、置きっぱなしに本を配置することで、
鳥の巣をイメージ。自身の住処の感覚で本を楽しむ。



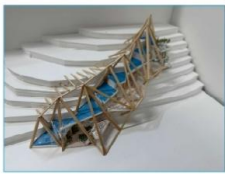
3階にあるオブジェクト
オブジェクトは、
2・4・5階に1個ずつ
3階に2個配置。
また、腰掛は5つ、
小上がりを1つ配置。

展望台

GL 6階+12.5m 7階+15m
北に豊後水道と黒潮を望むこと
ができる。木陰と海風、
そして後ろの水面によって
猛暑日の多い高知でも涼しく
過ごすことができる。

無人図書館

2階から5階に配置する無人の図書館。
低い階層には子供向けの本を置き、
高い階層には、小説などの読む時間
の多い本を置く。5階には小上がり
を設けて、寝たりゆったりして
くつろげる空間を作り出す。



模型全体

エントランス

広い空間で、待ち合わせ
としても利用できる



エントランス

全体図（内部）

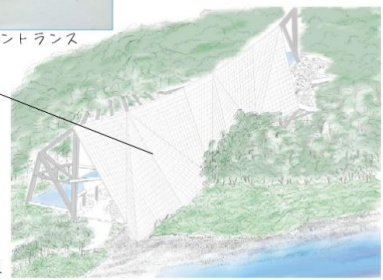
鉄骨

1部をのぞく、鉄骨を三角形
で配置して、広い空間ながら
強度を維持。

壁

2階から5階の図書館を覆う
ように架けられた壁。
この壁が、水面からの光を
反射して青い光を作り出す。

全体パース



佳作・BE賞

「自然や宇宙と交信する建築」

作品番号：29

共星

愛知工業大学 工学部 建築学科 4年

藤村 悠里

堀江 真亜矢

蔦木 美佑

「共星」は、宇宙空間を新たな公共空間として捉え、人と宇宙を結ぶ建築である。建築全体に観測・通信・情報技術を統合し、宇宙や地球の変化をリアルタイムに体験できる環境を構築する。情報技術は自然を代替するものではなく、人が宇宙を理解し、自然とのつながりを深めるための媒介として機能する。誰もが宇宙へアクセスできる未来を見据え、建築を通して新しい価値観と持続可能な社会を育むことを目指す。

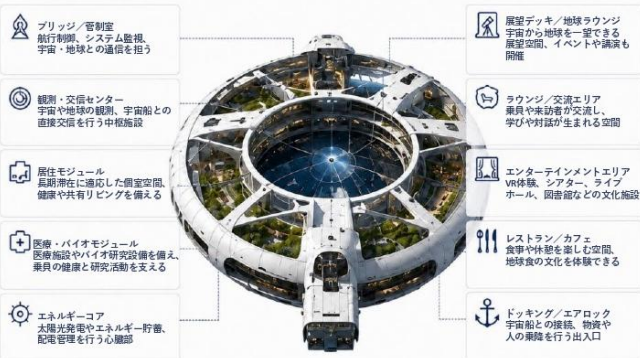
共星

—ひとつの星に生きることを知る—

宇宙へ旅立つことは、地球から離れることではなく、
地球を見つめ直すことである。宇宙と直接交信し、
情報技術を通してその営みを体感することで、
人類が同じ「宇宙船地球号」の乗組員であることを認識し、
持続可能な未来への意識を育む公共建築を提案する。



宇宙船の機能 | 大型客船のような多様な機能を備えた宇宙船



その他の機能：教育センター/スポーツジム/スパ/キッズルーム/ショップ/礼拝室/会議室/工房 など

宇宙との交信がもたらす意識の変化と未来への行動



宇宙と地球をつなぐ体験を通して、私たちは同じ宇宙船「地球号」の乗組員として、未来を共に築いていく。

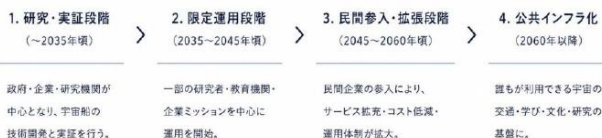
情報技術を取り入れ | 宇宙と人をつなぐ知的基盤

情報技術やAIは、宇宙との交信を深め、体験を拡張するだけでなく、
宇宙船そのものの仕組みや運用を最適化し、安全で持続可能な宇宙での暮らしを支える。



情報技術は、宇宙と人をつなぎ、宇宙船そのものを賢く進化させる。
宇宙との対話をより豊かにし、持続可能な未来へとつながる。

未来の公共インフラになる流れ



技術の進化 > コストの低下 > 利用者の拡大 > 社会的価値の向上

